

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：44417

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580124

研究課題名(和文) 中学校英語コミュニケーションタスク時のWTC要因: ClassroomWTCの構築

研究課題名(英文) EFL learners' willingness to communicate in task-specific context

研究代表者

豊田 順子 (Toyoda, Junko)

関西外国語大学短期大学部・英米語学科・准教授

研究者番号：40618104

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中学生のWillingness to Communicate (WTC: 第二言語で他者と対話する意思)を探るものである。Task Based Learningを中学校の英語コミュニケーション活動時に導入し、活動時、どのような個人的要因(能力・情意)や社会的要因(仲間、グループ、タスク)が英語学習者のWTCに影響を及ぼすのかを量的研究により解明した。結果から、教室で学ぶ中学生英語学習者のWTCは社会的要因よりも個人的要因の影響を受け、インタラクションタスク時は特に学習者の「タスク遂行の自信」が英語を話す意思に大きな影響を与えていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study explores factors influencing EFL learners' situational Willingness to Communicate (WTC) and how this evolves in Task-based Instruction (TBI). The study first investigates individual differences in a linguistic variable (English proficiency) and non-linguistic variables (WTC, affect, attitudes, motivation, and socio-dynamics in the L2) among participants (N = 135) using a questionnaire and English proficiency tests. Then, a series of interaction-based tasks were implemented over six months, and a questionnaire administered after each task to measure the participants' situational WTC during the task. Results indicate that rather than social variables, individual traits such as motivational, attitudinal, and affective disposition to learn the L2 as well as L2 ability and situational variables strongly correlate with EFL learners' WTC in task. It was revealed that situational perceived competence was key to increasing the learners' situational WTC in task interactions.

研究分野：応用言語学外国語教育分野

キーワード：WTC EFL Task based learning Task competence Situational WTC

様式 C - 19、F - 19、Z - 19 (共通)

1. 研究背景

(1) 近年、WTC 研究は英語圏である ESL 環境において発展を遂げてきた。1990 年代から second language acquisition (第二言語習得, SLA) 研究分野において、英語圏に住む移民や留学生などの第二言語 (Second language: 以下 L2) 学習者の英語を使う意思の強さの違い、すなわち WTC の違いが L2 習得に影響を与えるのではないかとその原因について研究が進められてきた (例: MacIntyre, 1994; MacIntyre, Clément, Dörnyei & Noels, 1998)。しかし、これらの先行研究の殆どが ESL 環境で実証されたものであり、日本のような EFL (English as a foreign language) 環境における実証研究は極めて少ない。Yashima 他 (2002; 2004; 2008) が留学する日本人高校生の WTC に関して、また Peng (2010; 2012) が中国における英語学習者の WTC について調査したことが主な EFL における WTC 研究として挙げられる。驚くべきことに、日本では小・中・高等学校教育の中で英語コミュニケーション実践能力育成強化が押し進められてきたが、これらの学校で行う英語コミュニケーション活動時に特化した WTC 研究は全く未開拓なのである。公教育の現場、とりわけ未成年者が就学する小・中・高等学校などの教育現場に入り、研究を行うのは、学校・保護者側・思春期の生徒からの協力を得ることの難しさから避遠されがちである。MacIntyre (2007) は、第二言語を話す意思である WTC は第二言語使用に直結していると主張している。学校で学ぶ子供たち英語実践能力向上を目指す指導方法を考える場合、まず子供たちの「英語を使いたい」という心理を調査・解明していくことは極めて重要である。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、以下の 3 つの研究目的を基に、中学生英語学習者の WTC を探るものであった。第 1 の研究目的は、TBL を中学校の英語コミュニケーション活動時に導入し、学習者が自らの意思で他者と英語で対話する機会を作り、その活動時、どのような学習者の「個人的要因(能力・情意性質)」が英語学習者の WTC に影響を及ぼすのかを解明することであった。学習者自身のどのような気質や能力が教室で「英語を話したい」、または「英語を話したくない」を左右するのかを探るものであった。

(2) 第 2 の研究目的は、英語で行うインタラクシオンタスク時、どのような「社会的・外部的要因(タスク、グループ、人間関係など)」が学習者の WTC に影響を及ぼすのかを解明することであった。

(3) 第三の目的は、上記の研究結果を一つの EFL における WTC 傾向としてまとめ、先行研究結果と比較分析を行い、日本の教育現場で英語によるコミュニケーションを実施する場合、どのような動機づけ育成が必要となるかを提言していくことであった。研究目的を達成することで、EFL 環境の WTC 研究を前進させること、ならびに日本の学校教育現場の WTC 研究を萌芽させることの両者に貢献できると考える。

3. 研究の方法

(1) 以下の 4 つのリサーチクエスション(RQ)を基に調査を行った。RQ1: どのような個人的・社会的要因が中学生の英語の WTC (気質としての WTC) に影響を与えているのか?, RQ2: どのような学習者の個人的・社会的要因がインタラクシオンタスク中の Situational WTC (状況ごとの WTC 傾向) に影響を与えているのか?, RQ3: TBL 授業は中学生英語学習者の situational WTC を向上させられるのか?, RQ4: 英語の学力差によって中学生の Situational WTC の変化に違いがあるのか?

(2) 調査方法: 調査対象校の 3 学年 4 クラス(計 135 名の調査協力者)へ TBL 授業を導入し、2 種類の質問紙を実施した。まず、1 つ目は、調査対象者の traits(一定の気質)を調査するものである。これに加えて、「英語能力要因」を英語実力テスト結果から入手した。2 つ目の質問紙は毎 TBL 授業後に実施した。Ellis (2003) のタスクの基準を満たした Focused interaction tasks (文法・語彙などを含めたインタラクシオンタスク)を教室に導入し、毎インタラクシオン直後に質問紙を実施した。この質問紙は約 5 か月間で、5 回行い、Situational WTC の変化を測定した。また補助的なデータとして、上記調査対象者のライティングとインタビューの結果、海外で留学する日本人ティーンエイジャー 19 名に対して行った質問紙調査結果も入手した。

4. 研究成果

(1) 分析結果 1 (RQ1 への回答)

RQ1 (どのような個人的・社会的要因が中学生の英語の WTC (気質としての WTC) に影響を与えているのか?) に回答するために、記述統計 (表 1) と相関分析結果 (表 2) を示す。表 1 は、trait-communication variables (学習者の一定のコミュニケーション気質に関する要因) と situational-variables in task (学習者のタスクの状況ごとに変化する要因) を示している。表 2 は、これらの両要因全体の相関分析結果である。

表 1
記述統計

Variables	<i>a</i>	<i>N</i>	min.	max.	Mean	<i>SD</i>
Trait variables						
Perceived L2 communicative competence	.97	23	1.38	6.00	3.92	.84
L2 anxiety	.83	8	.38	5.75	2.94	1.14
L2 Motivation	.89	12	1.33	6.75	4.20	1.09
Motivation intensity	.84	6	1.17	6.50	4.00	1.21
Learning desire	.77	6	1.33	7.00	4.41	1.09
L2 WTC	.90	8	.13	4.75	2.51	.92
L1 WTC	.87	8	.88	5.00	3.65	.83
Task Attitudes	.83	4	1.25	6.00	3.94	1.03
Group Attitudes	.90	13	1.46	5.62	3.80	.87
Group cohesiveness	.87	7	.71	5.43	3.40	1.04
Group usefulness	.87	6	1.83	6.00	4.26	.88
L2 proficiency	.90	5	11.60	96.40	48.13	21.94
Situational variables						
Situational FOC in task	.93	4	0.00	9.00	5.45	2.03
Situational task competence	.82	5	1.00	8.00	4.33	0.92
Situational task engagement	.93	6	1.00	6.00	4.34	1.07

表 2
相関分析結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. Perceived L2 communicative competence	1										
2. L2 anxiety	.55	1									
3. L2 motivation	.70	.44	1								
4. L2WTC	.68	.56	.55	1							
5. L1WTC	.22	.30	.26	.50	1						
6. Task attitudes	.33	.29	.39	.37	.33	1					
7. Group attitudes	.05	.06	.14	.04	.17	.17	1				
8. L2 proficiency	.57	.23	.48	.40	.09	.08	-.01	1			
9. Situational perceived task competence	.73	.44	.61	.64	.40	.41	.11	.47	1		
10. Situational task engagement	.60	.39	.61	.57	.42	.60	.26	.32	.78	1	
11. Situational FOC	.66	.49	.54	.67	.52	.39	.13	.42	.89	.81	1

ピアソンの相関係数を求めたところ(表 2)、学習者の L2 WTC と perceived communicative competence in L2 (.68) (L2 コミュニケーションの自信) の間には非常に高い相関があることが明らかになった ($p<.001$)。また、L2 WTC とその他のコミュニケーション要因: L2 anxiety, L2 motivation, L1 WTC, L2 proficiency との間にも比較的強い正の相関があることがわかった ($p<.001$)。しかし、社会的要因に関しては、L2 WTC と task attitudes との間に中適度の相関があるが、L2 WTC と group attitudes との間に

は相関が認められなかった。

次に、L2 WTC と相関が認められた trait variables (学習者の一定のコミュニケーション気質に関する要因)の中から、L2WTC へ影響力が強い要因を探るために、重回帰分析 (ステップワイズ法) を実施した。被説明変数は L2 WTC、trait-communication variables (学習者の一定のコミュニケーション気質に関する要因、表 2 の点線から上段部) を説明変数とした。その結果、3 つの要因: perceived L2 communicative competence ($t(1)=7.93, p<.001$), L1 WTC ($t(1)=5.97, p<.001$), と L2 anxiety ($t(1)=2.61, p<.05$) が最も中学生英語学習者の L2 WTC に影響を与えていることがわかった (表 3)。重回帰係数の有意性検定を行った結果、有意であった ($F[3,132]=71.21, p<.001, \eta^2=.62$)。これら 3 つの要因の中で、L2 perceived communicative competence (.51) が他の 2 つの要因: L1 WTC (.34) and L2 anxiety (.17)。よりも L2 WTC に影響を与えていることが明らかになった。多重共線性の可能性については VIF 値が 1.11 から 1.52 であり問題がないようだ。

これらの結果は先行研究結果 (例. MacIntyre & Clément, 1996; Baker & MacIntyre (2000); Yashima et al., 2004) とほぼ同じである。EFL 環境では、L2 perceived communicative competence と L2 anxiety が最も第二言語学習者の L2 WTC に影響を及ぼす。この結果に加えて、今回の調査では、教室で学ぶ中学生英語学習者にとって、L1 WTC (母語で話す意思) が L2 WTC に大きな影響を与えていることが明らかとなった。母語で話す意思が高い中学生は、英語を話す状況においても話す意思が高いといえる。

表 3
重回帰分析結果 (L2 WTC 予測要因)

	β	SEB	B
Perceived communicative competence	.51	.57	4.43 ***
L1WTC	.34	.06	.38 ***
L2 anxiety	.18	.06	.16 ***
Intercept		2.64	-7.65
R^2	.62***		

* $p<.05$. ** $p<.01$. *** $p<.001$

(2) 分析結果 2 (RQ2 への回答)

RQ2 (どのような学習者の個人的・社会的要因がインタラクシオンタスク中の Situational WTC (状況ごとの WTC 傾向) に影響を与えているのか?)

に回答するために、記述統計(表 1)、相関分析結果(表 2)、ならびに重回帰分析(表 4)の結果を示す。表 2 が示すように、従属変数 situational frequency of communication in task (タスク時のコミュニケーション頻度, 以下タスク FOC) と独立変数である trait-communication variables (コミュニケーション気質に関する要因) と state-communication variables (状況ごとに変化するコミュニケーション要因) との間には比較的高い相関が得られた ($p < .001$)。これら 2 種類の独立変数と従属変数の結果を順に示す。

まず、従属変数タスク FOC と独立変数である trait-communication variables (コミュニケーション気質に関する要因) との間との関係について示す。独立変数の中では、perceived communicative competence in L2 (.68) と L2 WTC (.67) がタスク FOC と強い正の相関を示し、L2 anxiety, L2 motivation, L1 WTC, Task attitudes, and L2 proficiency とは中程度の相関を示している。しかし、タスク FOC と社会的要因である group attitudes (グループへの態度) の間の相関は極めて低かった。

次に、従属変数タスク FOC と独立変数である state-communication variables (状況ごとに変化するコミュニケーション要因) との間には非常に高い相関が得られた ($p < .001$)。学習者のタスク FOC は perceived task competence (タスク遂行の自信) と perceived task engagement (タスク参加) から大きな影響を受けているといえる。

trait-communication variables (コミュニケーション気質に関する要因) と state-communication variables (状況ごとに変化するコミュニケーション要因)のうち、何が最もタスクインタラクション中の英語コミュニケーション頻度に影響を与えるか調査するために、重回帰分析(ステップワイズ)を行ったところ、3 つの要因 perceived task competence (タスク遂行の自信)、L1 WTC、situational task engagement (状況ごとのタスク参加) が影響要因であることが明らかとなった ($F [3,102]=156.40, p < .001, \eta^2=.82$)。これらの要因のうちどれが タスク FOC に影響を与えているか見るために標準偏回帰係数を求めたところ、perceived task competence (.64)、L1 WTC (.18)、situational task engagement (.21) となり、perceived task competence が最もタスク FOC に影響を与えて

いることがわかった。VIF 値は 1.25 から 2.96 であることから多重共線性は問題なかった。

タスクインタラクション中の英語コミュニケーション頻度に影響を与える要因について分析から何点かが明らかとなった。第一に、英語学習者の trait-communication variables (コミュニケーション気質に関する要因) と state-communication variables (状況ごとに変化するコミュニケーション要因)の両要因がタスクインタラクションにおけるタスク FOC、すなわち Situational WTC と相関がある。特に、タスク FOC は、「perceived communicative competence in L2」と「L2 WTC」と高い相関がある。これは ESL と EFL 環境における WTC 先行研究と同じである。また、気質に関する要因として L1 WTC, L2 anxiety, L2 motivation, L2 proficiency, and task attitudes がタスク FOC と相関がある。さらに、学習状況要因として situational perceived task competence や situational task engagement がタスク FOC と非常に高い相関があることがわかった。これらの状況要因は気質要因よりもタスク FOC に与える影響が大きいことが明らかとなった。

重回帰分析の結果から、situational task competence、situational task engagement、L1 WTC がタスクコミュニケーション頻度に最も大きな影響を与えていることが明らかとなった。これらのうち、situational task competence がタスク FOC に最も大きな影響を与えていることがわかった。

これらの「状況要因」が「タスクコミュニケーション頻度」に大きな影響を与えているが、すべての「状況要因」は「気質要因」である perceived communicative competence と L2 WTC と高い相関があり L1 WTC、L2 anxiety、L2 motivation、L2 proficiency、task attitudes とともに中程度の相関がある。これらのことを考慮すれば、タスク FOC は「状況要因」に大きく左右されているが、その「状況要因」は、学習者個人の英語への自信、英語学習動機づけ、L2WTC などの「気質要因」から起因していることがわかった。

表 4
重回帰分析結果(タスク時コミュニケーション頻度予測要因)

	β	SEB	B
Situational perceived task competence	.64	.16	1.42 ***
L1WTC	.18	.10	.39 ***
Situational task engagement	.21	.15	.42 **
Intercept		.46	-3.96
R^2		.82***	

* $p<.05$. ** $p<.01$. *** $p<.001$

(3) 分析結果 3 (RQ3&4 への回答)

次に、各要因の平均値を用いて、「測定時期 (TBL 前期、TBL 後期)」×「学習者英語レベル (英語成績上位群、英語成績下位群)」の 2 元配置分散分析 (反復測定) を行い、調査対象者の TBL 導入後の「タスクコミュニケーションの頻度」の変容を探った。この分析の前に、まず、調査対象者群を英語高学力群と英語低学力群に分けて有意差を確認した ($t(135)=-16.28, p<.001, r=.85$)。分析結果から、TBL 実践により、学習者群全体のタスクコミュニケーション頻度は大きく向上した。表 5 と図 1、図 2 は TBL 実践中のタスクコミュニケーションの頻度と状況要因の推移を示している。「測定時期 (TBL 前期、TBL 後期)」×「学習者英語レベル (英語成績上位群、英語成績下位群)」では交互作用が求められなかった ($F(1, 117)=.08, p=ns$)。「測定時期」および「学習者群レベル」に対する主効果をみたところ、「測定時期」 $F(1, 117)=59.40, p<.001, \eta^2=.21$ 、「学習者群レベル」 $F(1, 117)=15.86, p<.001, \eta^2=.37$) となり、英語成績上位群と下位群との間では「タスクコミュニケーション頻度」に有意差な差があるが、学習者群が一様にタスクコミュニケーションの頻度が TBL 導入期より TBL 後期に向かい向上したことが示された。

しかし、依然として、学習者群レベル間で、タスクコミュニケーションの頻度には有意差があり、英語学力が高い群の英語学力が低い群よりもタスクインタラクションの中で頻繁に英語コミュニケーションをはかる傾向があり、この差は調査期間中一定であることが明らかとなった。すなわち、英語学力が高い学習者はタスクインタラクションの中でより L2 WTC が高いといえる。

表 5

タスク時要因の推移

Situational variables	Mean (SD)				
	Time 1	Time 2	Time 3	Time 4	Time 5
Situational frequency of communication	4.78 (2.09)	5.39 (2.03)	5.52 (2.16)	5.72 (1.86)	5.80 (2.01)
Situational perceived task competence	4.05 (0.97)	4.37 (0.93)	4.33 (0.90)	4.45 (0.85)	4.41 (0.95)
Situational task engagement	4.25 (1.10)	4.37 (1.04)	4.45 (1.03)	4.31 (1.03)	4.30 (1.14)

Note: N=107 was available from Time 1 to Time 5.

()=標準偏差

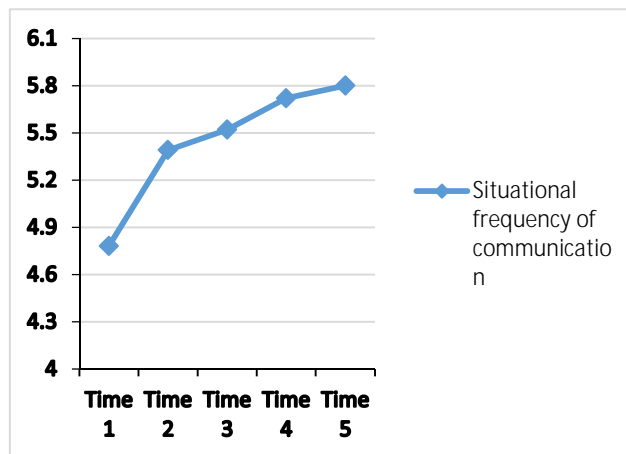


図 1. Situational frequency of communication in interaction-tasks for the whole group. (タスクインタラクション時のコミュニケーション頻度の推移)

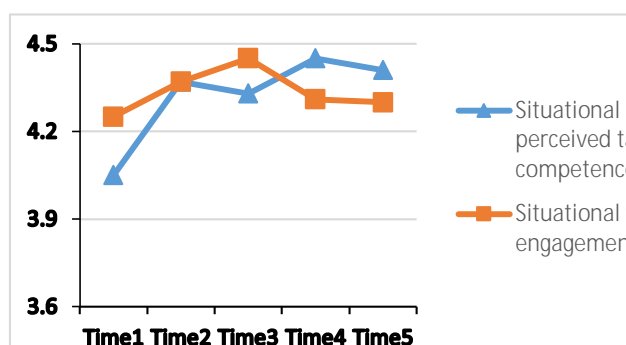


図 2. Situational perceived task competence and situational task engagement in interaction-tasks for the whole group. (タスクインタラクションにおける「その場のタスク遂行の自信」と「タスク参加」の推移)

表 6

英語学力上位群と英語学力下位群間のタスク時要因の比較

	S-FOC in task		S-Perceived task competence		S-task engagement	
	PRE	POST	PRE	POST	PRE	POST
High level	5.44 (1.80)	6.41 (1.61)	4.43 (0.73)	4.72 (0.68)	4.70 (0.84)	4.62 (0.94)
Low level	4.05 (2.15)	5.10 (2.21)	3.63 (1.02)	4.07 (1.10)	3.74 (1.13)	3.95 (1.25)

英語学力上位群 N=47, 英語学力下位群 N=60

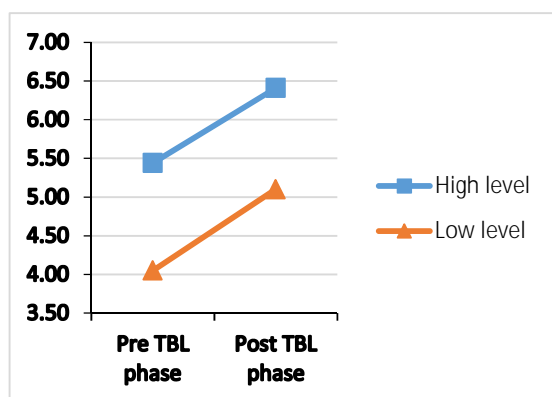


図 3. 二元配置分散分析反復測定の結果（英語学力上位群と英語学力下位群とのタスク時コミュニケーション頻度の推移比較）

総じて、中学校英語学習者の性格的気質、英語能力、英語使用の自信や動機づけなどの情意は、英語授業で英語を話すことと直結しているといえる。しかし、学習者間で個人差があるものの、学力差に関係なく、TBL は英語を話す姿勢を育成する方法として極めて効果的であることが今回の調査から明らかとなった。

引用文献

- Ellis, R. 2003. Task-based language learning and teaching. Oxford: Oxford University Press
- MacIntyre, P.D. (2007). Willingness to communicate in the second language: Understanding the decision to speak as a volitional process. *The Modern Language Journal*, 91, 564-576..
- MacIntyre, P. , Clement, R., Dörnyei, Z., Noels, K.A.(1998). Conceptualizing Willingness to Communicate in a L2: A Situational Model of L2 Confidence and Affiliation. *The Modern Language Journal*, 82, iv.
- Peng, J. (2012). Towards an ecological understanding of willingness to communicate in EFL classrooms in China. *System*, 40, 203-213.
- Peng, J., & Woodrow, L. (2010). Willingness to communicate in English: A model in the Chinese EFL classroom context. *Language*

Learning, 60, 834-876.

Yashima, T. Zenuk-Nishide, L., Shimizu, K., (2004). The Influence of Attitudes and Affect on Willingness to Communicate and Second Language Communication. *Language Learning* 54:1, (2004) 119-152.

5 . 主な発表論文等

〔国際学会発表〕(計 3 件)

- (1) Junko Toyoda. “The impact of task based learning on situational Willingness to Communicate in L2: The case of Japanese classroom contexts.” (Individual paper) TBLT in Asia 2016 (2016/6/25), Ryukoku University, Fukakusa (Kyoto-city)
- (2) Junko Toyoda. “The effects of task-based instructions on EFL learners’ situational Willingness to Communicate.”(Individual paper) AAAL (2017/3/19), Portland (USA)
- (3) Junko Toyoda, “EFL learners’ Willingness to Communicate.” (Individual paper). TESOL International Convention (2017/3/22). Seattle, (USA)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

豊田順子 (TOYODA, Junko)

関西外国語大学短期大学部・英米語学科・准教授
研究者番号：40618104

(2)研究分担者

松宮新吾 (MATSUMIYA, Shingo)

関西外国語大学・英語キャリア学部・教授
研究者番号：40411558